

力となって、いささかながら水巴先生の手助けが出来た。長頸子はその当時、5人のうち唯一人の学生で時間的に自由があったため、おのずから水巴先生との接触も多く、われわれの中心的な役割を果たしていた。」と記されている。(曲水55号「古き時代のよき作家たち」Ⅱ)

10月1日・「曲水」第1号(大正5年10月号)発刊。水巴選「四季雜詠」に3句採られる。同日、吟社10月例会、於水巴庵。互選句高点。

10日・水巴庵(流觴居)が赤坂から日本橋区浜町2丁目11番地の渡邊家本宅へ移る。

22日・吟社社中の大宮吟行に参加。2句。

「曲水」の編集・発行を手伝いはじめる。この頃すでに早稲田大学文科に在籍。

11月7日付青木よしを宛のハガキは、「寒燈句会」発足の事情を物語る好資料。(俳句編91頁写真参照)

11月11日・寒燈句会第1回が青木よしを宅で開かれ、翌年2月3日の第12回まで、毎週土曜日もちまわりで開催。

(以上大正5年の年譜記事の多くは随筆「あの頃のこと」「浜町雜記」に拠る)

吟社霜月例会出席 1句。

12月・吟社師走例会、席題「師走、水鳥」。互選句高点をとる。

曲水(1-3) 曲水句帖に弟亮之助(俳号鳥喙子)の2句が採られており、又同号社員名簿欄地方の部に、静岡県安東郡静岡中学校内、海野鳥喙子とあり、長頸子の推挙と思われる。

▽大正6年(1917)



1月元日・郷里の家で父母弟妹揃って新年を祝う。(小品「屠蘇」)

2月4日・吟社2月例会、上野花山亭。今月は職業調べをすることになり、出席簿の名前の上にそれぞれ職業を記す。長頸子は「半学生」と書いている。

寒燈句会、3日、10日苔雨方、17日樹人方、24日長頸子方。

「曲水」(1-5)。曲水句帖に3句。

3月・寒燈句会を3日流觴居、10日苔雨方、17日樹人方、24日長頸子方で催す。

4月・寒燈句会。7日樹人方、21日長頸子方、28日苔雨方。

「曲水」(1-7)。句帖に4句、小品文「電車の中で」がある。

5月5日付青木幸太郎宛ハガキ。

寒燈句会、5日流觴居 26日、30日、樹人宅で開く。

「曲水」(1-8)。句帖に4句、第1回募集文章入選作「猫の主」は鷹匠町時代に材をとったもので、選者山崎樂堂の選評。

6月・寒燈句会、2日苔雨方、9日、23日長頸子方、16日樹人方で催す。

20日・この月から曲水誌の編集者となった大谷碧雲居と連れ